

心の花賞 過去13回の受賞作品

心の花賞とは毎年1回、心の花の会員が未発表の作品20首を応募し、選考委員の合議により決定するものです。

2001年 第1回 盗めざる宝石 小川真理子

一つくらゐ秘密があつた方がいい例へば夫に聞かせざる声
十二年磨きつづけし鉱石をわが声帯に忍ばせてをり
原石をひとりひとりに渡しゆく初日は [i] といふ母音から
生徒の名覚えきるまへにそれぞれの声の硬度を覚えてしまふ
新しき黒板に映え如月の星座のやうな母音^{*}梯形
五等星ほどの明るさ喉の闇震はすことなき無声子音は
夫とみて日本語の星空となるわが口蓋のプラネタリウム
外国語学びはじむる楽しさは嘘を言ふのが下手になること
利き耳といふもあるらしそれぞれに首を傾け聴き取つてをり
原石をブリリアンカットするやうに発音矯正重ねてゆくよ
このうへもなく輝くは抱擁韻ゆたかなる詩を読みあぐるとき

「声失くすよりも」と放射線^{コバルト}浴び過ぎし渋沢孝輔詩人たりけり
夢にのみ逢へる人あり夢にこゑ伴ふすべを誰か教へよ
血肉と思ひこむなかれ推敲を重ねるほどに糺さるる母語
春の日の手話のあやとり見てをればわが眼こそ癢ひたる如し
重さうな指輪連ぬる中年の生徒はみづから研ぐことをせず
心して磨りたるを筆にふふませる人よあなたが母でよかつた
現し身に宝石を仕舞ひて眠る鍵のすくなき一生送らむ
流れ星行き過ぎし空に銜する瀕死の言語の音素のひびき
唇も白菊も焼かれむされどわが骨壺に光るものあれ

*フランス語の母音一六個の調音点関係図

2002年 第2回 あるいは未来が 堀越貴乃

善坂の闇に^{はくれん}白木連ただわれが諾えばことなき別れかも
人の部屋に夜半目覚めればじんじんと宇宙のような暗さ眩しさ
とりかえしつかざることをせずにゆく果てこそとりかえしつかざらん
辞書の上のりんごそのままそのままにきみはがんばれこのままここに
この町に帰りくる一人だつたかもしれない夜をこの町を去る
ふるさととは前にあるべし三十代眼前にしてより前方に

誰に話しかけるともなく大声で話しはじめる大家族なり
わが帰郷をわらつてよろこぶものたちにゆるされるなよわれのなかの俺
思いつき荒れてみるのもよからん家族の茶碗すすぐ指先
会いすぎて重ねすぎたる記憶より最初のきみを取りださんとす
メールボックス閉じてパソコンの蓋閉じて目蓋閉じて今日を閉じたり
午後の日の傾く道を駅前のポストまで行く下着をつけて
線路の向こうわれを呼びすてる女友達おとなのかたちのおさなともだち
小さき町の大きく見ゆる否おおき町なり振りだしのわれにふるさと
味噌汁をこぼしただけがきつかけの涙しばらくとどまらざりき
ロックンロール族のリーダー十八歳いなかに帰ると言いしその後
ドアを開け「おやすみ」と言いドアを閉める人を見なかつたが明日も会いたい
閉じながら見えるものあり開かねば見えぬものあり今はみひらく
きみの町へきみには会わず行くときの車窓の麦の熟れゆくばかり
高く高く追いつめられたし追いつめたしあるいは前が上であるなら

2003年 第3回 東京は雨 東條尚子

それにしても人が多い

犬濡れて銀色になつて身をふるう 総ルビはむず痒いと思う

水系ごとに水のにおいは選ばれる十七番線にひかりをえらぶ
圧倒的多数になつてたどり着く意見だ意見だ雨の東京
一日中どンドン体ぶつかつて半分ガラスの電車の扉
羽化したい背中としたくない背中犇きあつて階段へ向かう
ぶつからない足を踏まない遮らない幾多の困難の中を歩めば
思い出ができる前から積み立てのアルバム貯金は毎月引かれた
中心から外へ忘れられるだろう東京近郊路線図の線
制服は透きとおりそうになつて立つそれはよその電車だと言う
乗りかえがまだよくわからない
回線の混乱のような音はして立ち止まつてはみずみずと聞く
構内放送何か言つてる拡声器の一つに水流のようなもの棲む
現在地はいつも赤くて赤信号置くようにして地図を離れる
帰つたら洗濯機まわそう洗濯量極少量に目盛りを合わせ
Suicaの使い方を覚えた
ICチップかざして都市に祝福を与える無言が入る出ていく
地下駅の電車が行つてしまつたあと何かわからぬゴォーつという音
東京駅抜けてしまうまで十五分誰かに時間を貸した気がする
駅にかかわる電車の直線次次となぜ帯文を思い出すのか
つり革につかまつて聞くラジオ局海岸線をカヴァーしている

月曜日は『ビックコミックスピリッツ』の発売日

君は買ったまんがを膝にひらく頃「東京は雨」を受信始める
階段を銀のてすりは欄干になるまでのぼつた 橋だつたのだ

2004年 第4回 野川のように 中西由起子

ほととぎす声高く喚ぶしののめの首から下はまだ夢の中
一人分の抜け穴として見上げおり楡の木の間のまるい青空
水の音しずかに響くハケ道の水よりほかに触るるものなし
何に率かれて来しにあらねど泉あり祖父の齡の桜の木下
湧き上がる水が水面を破る力ボトルに詰める丸き背が見ゆ
かたばみの草かた靡く寺院跡 開きっぱなしのカナヘビの口
深々と展示ケースをのぞくときわが唇は尖るものらし
樹が鳴れば鳥囀れば近代が吾を呼びに来る声を飾りて
糸遊のゆらぐ野に伏す“恋人”を“友”と直した国木田^ど独^つ歩^ほのように
いちじくを半分もらいし夢にしてあかねさす恋ひと日残れり
頭頂の青き羽毛を逆立てて怒るわれこそ鶴に似るらん
切りたてのわが髪吹かれ上水の水底にもういない人たち
あらあらと武蔵野台地を領しゆく雨より重い溜め息を聞く

川になり帯になり細くゆるゆると男は女を絞めていたりき
斜交いに居るさびしさとやさしさの距離を縮めて会わんよ明日は
青桐の肌^{はだえ} われより若く見ゆ 折々の夜を月がうるおす
恋うこころ縦にななめに詰め込んでわれのかぼんはどンドン太る
懐に搔い込むように鳥の声蒐めていれば耳ひとつ殖ゆ
薄れつつ途切れてしまった足跡は流れの向こうにまた続くべし
うた唄う野川のように君は来る草の緑の起伏に沿って

2005年 第5回

畿外を語る貴族のごとく 屋良健一郎

無知こそが無傷の秘訣たる島に我は戦もアメリカ世^ゆも知らず
山形へ国費留学せし父の「ヤマト」と呼ぶは異国の名前
KOZAの街を包む暴徒の焰見ゆ復帰前後を語る目の奥
沖繩尚学^{おきしやう}に独立論者の大歓声 力道山を見るような目で
どれくらい食べれば傷を癒せるか「食べなさい、食べなさい」と迫る^{おぼー} 媼の
足早に母は過ぎ行く^{ぐしかみ} 具志頭村立歴史民俗資料館戦争コーナー
唐・大和・アメリカ・大和 寝不足なカメレオンの眼に朝の陽は沁む

郷土史にふれることなき妹は渋谷ルックでクラブへ通う

スタバにて辺野古^{へのこ}の話題にふとなりぬ畿外を語る貴族のごとく

座り込みに来た浜っ子と知り合った春、座らざる地元民われ

映画館まであるらしいこの島の持てるブラックホールの中に

頭上行く米軍ジェットのうるささにただウォークマンの音量を上ぐ

アンポさえ知らぬわれらの^{まぐわ}目合いは基地の明かりを見下ろす丘で

「不感症かも」と言われた夜もある電光表示されるデシベル

しまんちゅ^{ひと}島の女の女は水着にならざれば観光客に見入る夏なり

戦没者追悼式の壇に立つ首相に向かう百のケータイ

沖縄県遺族連合のテントにはいつか絶滅する遺族たち

平和祈念公園内の店頭に青の「島人」Tシャツ並ぶ

ひとひらの疑念も灰にする花火われらも祝う独立記念日

はがすべきかさぶた持たぬ我なれば掲げん若く明るき歌を

2006年 第6回 綺羅星に捧ぐ 高山邦男

水槽の魚に餌をやり部屋を出る今日を演じるこころ探りつつ

扉閉ち鍵を廻せば部屋の中われが不在の時間が始まる

億劫な気持ちを抑へ一日の無事願ひ車体丁寧に拭く
都会では高所に広い空がある地上の狭き空われは見る
植物はしなやかに初夏を泳ぎ出す空を怖れる事あらざらん
信号の秩序に従ひゆるゆると連なる惰性ゆるく苛立つ
見上げれば巨大な文字の看板が迫り出し人の視線奪ひ合う
保育園、花屋、道行く人々の時間ゆ街の影に華やぐ
みなみ風夕餉の匂ひ運びゆくわれに行きたし未来の故郷
終日を同じ座席で過ごしをり車体操作の部品のやうに
二十三夜交差点まで客と来て県道以前の原を思へり
元基地は昭和の名を持つ公園に脳裏には消えぬ真夏の日差し
螢光のV字を背負ひ夜の闇に浮き沈む道路工事作業者
わが仕事この酔ひし人安全に送り届けて忘れられる事
逃亡の末の常夜かトンネルの最深部朝のない灯を浴びる
運転手と無職になりし年寄りが多く聴くらしラジオ深夜便
暖かい気持ち未来より感じたり今際のわれが過去思ひしか
太陽光雲のプールを零れ落ち煙雨の朝も明るくなりぬ
君の目に映るわれ目を背けたしこころの襪は湿り臭へり
清掃婦が欠伸する朝しろがねの光の視線に晒され歩く

2006年 第6回 風の手紙 細溝洋子

巣を作る場所を定めし鬼蜘蛛のその^{たかぶ}昂りの初めの一糸
再生の感覚というはいかほどかむずがゆからん蜥蜴隠るる
掃除機に吸いてしまいし黄の虫はナミテントウであったかどうか
かたつむり小さく突けば「やれやれ」と角を振りつつ殻に入ったり
アシナガバチ疑わず来て軒下の取り払われし巣をめぐりおり
そういえばフナが戻った川だった 橋に突き出ている竿の先
新しき地下鉄ホーム 白長須鯨の中に白線がある
「亀がいた」ひとりが言えば次々に亀の話を 雨の庭園
見たくない日も自らの顔を見てアメンボはくるりと回るのだろう
「糸」という言葉正しく使う人、上までかけるシャツの貝ボタン
ささやかな苦言を言いてしばらくを黄金虫のごと光りていたる
質問と答えがふいに入れ替わる きつねが角を曲って行った
私の方がきっと正しい 証明をしたがる栗鼠のしっぽをつかむ
鳥の群れいっせいに向きを変えるとき裏返さるる一枚の空
私には読めない楽譜しなやかに灰色のねこ塀を越えゆく
お節介して叱られてばかりいるスズメがきっとあの中にいる

秋になればトンボが浮かぶはずの^{そら}宙、今すっきりと空が^{くう}占めおり
飛ぶ不思議笑うふしぎを頷てずに鳩と私が影を重ねる
白き壁昇りてゆきし紋^{もんしろ}白蝶は光の白に溶けてしまえり
風の手紙となりて飛びゆくツバメ見ゆ私に雨が近づいてくる

2007年 第7回 土管のように 藤島秀憲

生垣を低目低目に刈り込めば父から見ゆる空が広がる
刈られつつ父は白髪を手に乗せて蝶を飛ばせるごとくに放る
おもらしの後は黙禱するように壁に向かいてうなだれる父
朝顔市のニュースを見つつ甦る父の記憶が六十年前に
年齢差日に日に開いてゆく感じ父の歩幅に合わせて歩く
短命の家系にありて現在も記録更新中です父は
多数決とらずに竹を二人前とりて父との夕食とする
乱暴に、たとえば土管を持ち上げるように庭から父を抱き上ぐ
平坦に父の寝息がしておりぬ一夜痛みの和らぎてあれ
吃音の血をわが代で絶やすぞと言えば憎しみ父の目に浮く
風呂場にて裏返しして洗うなり父の下着という現実を

客観視できぬ近さに父がいて入れ歯外して嘗めはじめたり
眠りつつ時折笑い出す父は昭和を夢に見ているらしも
やわらかさ・色を確かめ流したり流し忘れていし父のもの
盲腸の術後のような顔をして「笑点」睨みつけおり父が
靴下の履き方を教えまた教え父と二人の八月六日
すいとんと今年は父の言わざれば冷麦を食う終戦記念日
切り株のごとき踵をざらざらと音させ父がトイレに立ちぬ
どろどろの濃き血液に両足が抜けなくなりて父と棲む家
亡き父といつかは詠まん 一人にて固めに炊きし飯を食いつつ

2007年 第7回 龍を待つひと 永田智子

眠るとき裡うちを流れる水分の何割が汝へ傾ぐな かしのだろう
ひとふさの髪ほどかれて湯に泳ぐ内包したる思いのままに
薬局の領収証にくるまれて銀の指輪が鈍くひかりぬ
生命の危険は無いが完治せぬ病に罹りかかいると言われつ
己が身の死したるのちの世のことを三十歳で思い初めたり
坂の街 空へと行ける階段の一つのような家を訪ねる

長崎に育ちしひとの声しずか語尾にサの付く訛りのありて
手をつなぐ恥ずかしさからこぼれだす昔話と月の明りと
最近ね赤ワインに溺れてみたいと思うの、比喻ではなくて
なにもないなにも見えない夢のなか残るひとつの望みをわれに
一枚の鱗のようなコンタクトレンズを嵌めて外へ泳ぎ出づ
海を捨てはじめて陸を歩みたる人魚の脚もかく痛むとや
君の見る夕陽に比してわれの見る夕陽は違う速度で沈む
伝えたき言葉を何度のみこめば黒き真珠になるのだろうか
病名を「龍待ち」と書く 天空に解き放ちたきものが多くて
復帰せし職場で唯一違うのは重い書類を持たされぬこと
気を失うごとく眠りにつきぬ疲労という語も浮ばぬうちに
月を見るひとの顔まで輝きてわれを照らせるものとなりたり
生かされる存在なれば貝も吾も冷たき水をゆっくりと飲む
震えている指を鎖骨に添わせおりはじめに雨よここに降り来て

2008年 第8回 アボカドの種 あずま 東 恵理

七年の育児日記に吾子は這い前歯ぬけおちランドセルしよ背負う

まぼろしのピカチュウふるふる進化して春の小部屋に雷光を吐く
首細き長男なりし抱きよせれば喜びながら必死に逃げる
目鼻口われのパーツをひきついで不意に差しだすカエルの死骸
年下のおみなごに子はまた負けて銀紙でおる角のある鳥
駅を降りひとに背中のひとつずつあるさみしさに傘をひろげる
ことごとくわれを否定する母親の受話器をおけば吾子と目が合う
ひとつの席にわれという物おかれあり寒さもどりし春の雨の夜
灰色の石たえまなくおちてきてわれは知りたり心臓の位置
いろのない悲鳴の息をふきこんだ紙風船を子どもがついて
こんなときお母さんならぶたれたといえは息子は櫛の木になる
鉄のくさり首にまかれてうなだれる犬と気づきておののきたりし
お母さんかわいそうだねと吾子いえば深夜ひそひそ泣きたるわれか
ゆっくりと日差し移ろいなにひとつ欠けてはならぬものを照らせり
気がつけば声を殺して泣くくせを吾子はもちたり吾子はもちたり
お母さんはちゃんとお前を愛せてるか排水溝にあわ追い詰めて
蜘蛛の巣の奥にくもの巣お母さんがあのとき飛べばお前はおらず
かたつむりの軽さに傾ぐ葉っぱありこの世はきっと、きっと優しい
アボカドの大いなる種とりだしてひとがひと生む不思議をおもう

手のひらに運命線のいりみだれ南向きたる窓ガラスふく

2009年 第9回 春の形 武藤義哉

雨雲と花粉と種子を混ぜ合わせ春とは風の工程なのだ

立ち止まり虹見上げればわたくしの背骨は虹の曲率を得る

黄の色が異界にきつと飽和して滲み出たのだ 菜の花畑

たんぽぽの綿毛を預かり青空はまたたんぽぽの配置を変える

新しい命のために小鳥らは命を奪う うららかに春

草原があり風が吹き もしそこに馬がいたなら完全だった

現実の世界のはずれに立っている岬の先の白い灯台

海峡には信号がありもう長く海には青で陸には赤だ

漆黒のピアノであるが春だけはうすもも色でいたいと思う

満月の澄み切った夜と朧の夜いずれがよいか 狂うとすれば

現在は常に傷つけられている時計の針の先の刃やいばに

太陽とともに走ってきた貨車が太陽をやり過ごして止まる

なめらかなバターの肌にしたなら解ける気がする幾何の問題

この春も桜の花が咲きそろふ版画を再び刷り増すように

焼きたてのフランスパンをかるやかに小脇にかかえ あ、にわか雨
飛行船は四月の空に浮上した放浪ガスを充満させて
命という重荷もすっかり流れ去り春の渚のうすい貝殻
しゃぼん玉吹けばゆらりとふくらんで春の形はきつとこんなだ
心だけ遠くへ行ける乗り物だ若葉のなかを揺れるぶらんこ
後から柳の枝にやわらかく触れられたから 振り向いたのは

2010年 第10回

病院のマトリョーシカ 松岡秀明

清瀬とふ美しき名を持つまちに「病院通り」が一キロ続く
ホスピスへ長き回廊歩みをり製鉄所めく中央棟より
われの名と響きの似たる二十九の女がホスピスに入る午後四時
ホスピスへの入院希望を書く紙に誰の意志かを質す欄あり
秒針を見つつ脈とる看護師の喉仏なき喉に昼の陽
死にちかき若き女を診るわれの腕に時計はいささかきつく
患者らの漕ぐ車椅子ゆつくりと森の方へと光をはこぶ
マトリョーシカ、ベッドの上に置きしまま若き患者はしばらく不在

つぎつぎに病状を問ふ付添ひに答ふるわれは蝟の眼持つらむ

炎天に稲光して顔を上ぐベツドに凝る患者を逃れ

「死ぬことは怖くないけど、不安です」彼女は桃を食べながら言ふ

森の奥 舂^{はしけ}のやうな病棟に見舞ひの子らが吸ひ込まれゆく

カブトムシ獲りし師長は窓越しに患者へと見せ空へ放てり

「先生が持つてて…私が死んだあと」手も足もなき人形がある

病むひとは森を見詰むる その頬に鯰の腹の白さ現はれ

罫線も活字も美しき赤なるは麻薬を処方するための紙

くちなは 蛇^{くちなは}の抜け殻がある芝の上に車椅子二つ乗り捨ててあり

藪枯らし刈られしままに枯れてをり病棟に草燵^{くさいき}れさせ

夜の蟬にさめた光で応ふるは霊安室への電子道標

マトリョーシカ分かちて終^{つひ}に現はるる虚^{うろ}をもたない小さき人形

2011年 第11回 さくらあやふく 山口明子

本箱が本を吐き出す部屋の中化粧水濃く瞬時にほふ

家ゆがむ揺れに車にすがりつつ背中に守る五キロのいのち

瓦落ち土塀のくずれたるままにひろがる風の不気味に無音

帰り来し夫の背中に触れむとす三月十一日のゆふぐれ
みちのくに灯の消えし夕 食料を雪に冷やせる夫の手見つむ
使ふ時来たかと夫の持ち出せるウエディングキャンドル余震に揺るる
停電の凍れる闇を震はせる音の兆しにいくたびも醒む
停電と余震続く夜 子は不意に鉄砲水のごとく泣き出す
自転車^はで食料を探しに行く夫の背に降りかかる刃の如き雨
壊滅と聞く大槌に妻と子を迎へに行くといふ人の笑み
停電後の画面より伸ぶ くろぐろと怒れる海の長き圧力
歌ひつつ子らと歩きし海の町 がれきにしづみ重機行き交ふ
押し上げし波のかたちをとどめつつ錆たり屋根の上の車は
カーナビは知人の宅を不意に告ぐ がれきのみなる道走るとき
旅館よりひと月通ひまた去りし少女のその後問はずにおもふ
倒れたるさくら古木の梢よりけぶれるごとく萌えいつるもの
北を指す針セシウムに狂ふ春さくらあやふく光りつつ咲く
放射能の雨降りつづく東北にみのる果実のあをき沈黙
セシウムの風きれぎれに光る午後 砂いぢりする幼き手あり
大地震、大津波過ぎしみちのくにしづけくみつる苦しみの嵩

2012年 第12回 藤棚の下 山本陽子

子が靴を履きかふる間を我は立つほそき実揺るる藤棚の下
一日を子に付き添へぬわたくしは昇降口に手を振り別る
踊り場を折れて見えなくなりぬる子てとちとてとと足音も消ゆ
ミドリガメ二匹イシガメ一匹にちやあねと言つて校門を出づ

三年前。校長室には七人の「対応チーム」が待つて居た。

学校に行き着かぬ子の手をとりて登校せむと約束しにき

注意欠陥 多動
AD／HDの例と〈通常〉の限界なるを一気に言はる

八人の花一匁われひとり「この子がほしい」の反対を聴く

第八章ひらけば夙に鮮鮮し日に読み来しがくけうはふ学校教育法なれど

「わかたけ教室」は隣の隣の町にある情緒障害学級。半年前、週一度の通級を開始した。

情緒とは詩歌の言葉にあらずして特 別 支 援
Special Needs

教 育
Educationはあり

グワンバツテキタノデスヨと言はれ居り我がえれふあんと・じよ一くの日日を

国語でも算数でもなく〈人間の勉強〉をする 教科書は無い

学校のはしごをさせて尾山台ハツピーロードを一人で歩く

練習に参加できないまま運動会まであと一週間。出張、やめやうか。

教室の窓に子の見ゆわたくしが見上げて居ると心付くまでを

札幌の切符はゆづり組体操一人技、二人技さら温習ふ宵宵

もう赤きプチトマトの実今日もまた体操服は汗に汚れず

眠るふりしながら眠りゆけるわがdream maker, heart

breaker

* * *

ぽんぽんと花火は上がり水筒の麦茶に氷多めに足して

今日だけは脱走禁止 亀池に二重にかかる緑のネット

子の名まへ鋭き声に呼ばれ居りたなびくやうに子はうごき出づ

一人技、二人技あはれ三人技 体操服に砂の付きゆく

2013年 第13回 水のくれなゐ 岸並千珠子

肉感を拾はぬあをの襞重ねまだおぼろげなる水彩の鰐

いきものは色を濃くして絵は褪せよささめきやまぬはつ夏の日

俯瞰図はサイコロの●^{イチ}どこにでもころがりさうな画室にひとり

筆洗の天井に映す水跳ねてその魚^{うを}はわたし 見ぬふりしたり

編集者の失恋話のあはあはとわが空腹はフロアに満ちぬ

^{うすきひ}浅緋の姿態にありしが書店にて三ヶ月後の追熟をなす

彼を得し彼女のよろこび思ふとき挿絵は軋むこの結末の

スカートが尾ひれに変はる筆圧に不安顔なる素描の少女

去年描きし横顔はいまだ口すぼめ薬局にをりぬひとつ歳とり
君のみぬ椅子にもたれて画廊の雲に降る雨、日に照る光
高すぎも低すぎもせぬけふのわれ君の画風に吹かれてゆかむ
ねむくなる夕映えのカフェ折衷案入れたるカバンに水の音せり
まだ知らぬ記憶塗りつつゆびさきは画紙の水際^{みぎは}にゆがみはじめる
重弁花の線に迷ひてトレースの反転すれば裏返る部屋
風蘭をまとふをんたとすれちがふ画紙より逃げて影と遊べり
水無月の雨後は銀朱のにほひして会ひたさはチューブ絞りきるとき
黒ダリアつぼみ解きつつ痛からむ余白おし分け日々に寄り来る
くづれゆく君を知りたしゆるやかに水やれば育ちゆく水彩紙
保護色にモチーフを待つ深海のひとりでなければなにもできない
翼もつ鰐のデイトール絵筆にて水のくれなゐ括りてゆけば

過去13回の選考委員と応募総数

第1回 選考委員 佐佐木幸綱 石川不二子 伊藤一彦
宇都宮とよ 晋樹隆彦 谷岡亜紀 俵万智
応募総数 88篇

第2回 選考委員 佐佐木幸綱 石川不二子 伊藤一彦
宇都宮とよ 晋樹隆彦 谷岡亜紀 俵万智
応募総数 85篇

第3回 選考委員 佐佐木幸綱 石川不二子 伊藤一彦
宇都宮とよ 晋樹隆彦 谷岡亜紀 俵万智
応募総数 70篇

第4回 選考委員 佐佐木幸綱 大口玲子 黒岩剛仁
俵万智 西田郁人
応募総数 75篇

第5回 選考委員 佐佐木幸綱 小川真理子 黒岩剛仁
俵万智 西田郁人

応募総数 7 1 篇

第 6 回 選考委員 佐佐木幸綱 小川真理子 黒岩剛仁
俵万智 西田郁人

応募総数 6 2 篇

第 7 回 選考委員 佐佐木幸綱 小川真理子 黒岩剛仁
俵万智 西田郁人

応募総数 8 2 篇

第 8 回 選考委員 佐佐木幸綱 小川真理子 黒岩剛仁
俵万智 西田郁人

応募総数 1 0 4 篇

第 9 回 選考委員 佐佐木幸綱 大野道夫 黒岩剛仁
住正代 俵万智

応募総数 9 6 篇

第 1 0 回 選考委員 佐佐木幸綱 大野道夫 黒岩剛仁
住正代 俵万智

応募総数 9 6 篇

第11回 選考委員 佐佐木幸綱 大野道夫 黒岩剛仁

住正代 俵万智

応募総数 96篇

第12回 選考委員 佐佐木幸綱 大野道夫 黒岩剛仁

住正代 俵万智

応募総数 104篇

第13回 選考委員 佐佐木幸綱 大野道夫 奥田亡羊

住正代 俵万智

応募総数 110篇